

第4章 ボランティアの未来像



福島と鎌倉の子どもたちの交流のアルバムより（鎌倉・建長寺にて）

繋がりつつ、生きる —「鎌倉てらこや」通信

早稲田大学社会科学総合学院教授
NPO 法人「鎌倉てらこや」理事長
池田 雅之

今、私たちにできること

3月11日の午後、これまで体験したことのない大地震と津波が日本を襲った。それに追い打ちをかけるように原発事故が相次いだ。この東北地方に起こった大惨事の深刻さは、私たちの想像を絶している。

ここ1週間ほど、ときどき起こる余震と停

電にうろたえながら、私は刻々と変わるテレビの情報に釘付けになっている。被災の実情が画面いっぱいに映し出され、目を覆わんばかりの悲惨さが日々露わになってゆく。未曾有の国難である。私はショックから初めてうつ状態に陥った。

今、私たちは被災した方々に対して、具体的に何ができるのか。「鎌倉てらこや」は、教育ボランティア組織ではあるが、ほかの地域との助け合いのネットワークも築いてきた。それは「全国てらこやネットワーク」（大西克幸理事長）である。

この「全国てらこやネットワーク」（略称「てらネット」）は、全国20ヶ所の「てらこや」

を結ぶ組織体である。これらの「てらこや」が立ち上がることによって、微力ながらも、被災地の方々に何かしらの援助の手を差し伸べることが出来るのではなかろうか、と期待している。

私たちスタッフは、大西さんやうちの事務局長の上江洲慎君らと相談しながら、短・中・長期に分けての支援の方法を模索している。沖縄の安里繁信さん（2009年度日本青年会議所会頭）にも呼びかけ、全国の青年会議所（JC）のメンバーとも協力体制を築いていきたい。

まず、直近で取り組むべきは現地行きを模索しつつ、義援金を募ることであろうか。と同時に、お金をどのように集め、その志をどの組織・団体に届けるかも熟慮しなくてはなるまい。

東日本大震災という国難に対して、「鎌倉てらこや」としてどう向き合い、どのような助け合いのネットワークを構築していけるのか。この難事にひるむことなく、刻々と変わる状況に目を向け、対処していきたい。

(2011.3.15 記)

被災現場から考える支援

私たちはこれほど悲しみに満ちた、陰鬱な春を迎えたことがあっただろうか。

4月12日早朝、私は仲間と共に震災の避難所と被災地に向かった。訪問先は会津若松市（福島県）、北上市、釜石市、大槌町（岩手県）の4ヶ所で、主たる目的は、視察と援助の打ち合わせであった。同行者は、湯沢大地（全国てらネットワーク前理事長）、大西克幸（全

国てらネットワーク現理事長）、池田季実子（鎌倉てらこや副理事長）、上江洲慎（同事務局長）の各氏であった。

最初の訪問地、会津若松では、原発被災地の大熊町から避難している子どもたちのケアについて、話し合いが持たれた。大熊町役場の方からも、「鎌倉てらこや」の学生たちのサポート（勉強の手伝いと遊び）が可能なら、ぜひお願いしたいと要望を受けた。それが実現すれば、ゼミ生の岩沢圭一郎君のお母さんが、学生たちの宿泊を会津若松の自宅で引き受けて下さるとおっしゃった。

北上市では「てらネット」の伊藤隆一、菊地隼さんらに迎えられ、津波被害の大きかった釜石市と大槌町の復興支援について打ち合わせた。「てらこや」としては、得意分野の子どものケア（鎌倉での受け入れも含めて）を中心に協力していきたい旨を申し上げた。

最後に北上の皆さんと一緒に訊ねたのは、釜石市と大槌町の被災現場であった。釜石の商店街は、見るも無残な瓦礫の山であった。大槌町の津波による被害はさらにひどく、町が壊滅状態となっていた。強風が吹きすさび、瘴気しょうき漂う死の町と化していた。

このような過酷な現実に対して、「てらネット」と「鎌倉てらこや」は、どのような連携の支援活動を起こせるのか。この2日間の実地見聞は、その可能性の道筋を付けていくための試練の旅であった。私は震災の現場を見て回るうちにその惨状に打ちのめされたが、帰宅後、うつ状態から回復している自分に気

づき、驚いた。私は自分の為すべき課題に直面して、どうやら精神の危機から脱したらしいのだ。(2011.4.15 記)

被災地から届けられた「贈り物」

鎌倉でクリニックを開いている酒井太郎医師は、震災後、鎌倉からいち早く被災地入りしたお医者さんである。テレビや新聞の報道を見るにつけ、救える命がたくさんあることを知り、居ても立ってもいられなくなったのだ。そこで、大震災の10日後の21日、医療チームほか2名とともに、宮城県南三陸町に入り、3日間、ボランティアの医療支援を行ってきたという。

人口約17000人の漁港町、南三陸町は、壊滅的な被害を受けていた。小学校、公民館、老人ホームなど45ヶ所が緊急避難所として設けられていた。酒井医師たちは、医療支援の無かった避難所の1つに行き、不眠不休の24時間体制で診察を行った。

また酒井医師は、地元の訪問看護師とともに、在宅医療が必要な高齢者への往診にも出かけた。多くの寝たきりのご老人たちは避難できず、ライフラインも断たれ、家族と一緒に自室で孤立状態にあった。酒井医師が訪ね、「神奈川県から来ました。大丈夫ですか？」と声をかけると、ご老人の1人は「神様が来てくれた！」と喜びの声をあげたという。

ご家族からは、「遠くから来て頂いて有難う」と何度も感謝され、「東北の人は、なんて我慢強くて、優しいのだろう」と感動のあまり涙ぐんだそうだ。

酒井医師たちは、心臓病やぜんそくや高血圧などの持病を持つ人たちも診察した。一方、長引く避難生活のために、不眠、風邪、便秘などで悩む健常者の方の診察も行った。

被災者同士は津波や地震の恐ろしさについて、なかなか語り合おうとしない。それでも、酒井医師には重い口を開く時があった。一緒に働いた地元の病院職員には「津波の中から声がしたけれど、何もできなかった」と打ち明けてくれた方もいたという。子、親、兄弟、友達を失った被災者の方々がいる避難所で、3日の間、夜を徹して診察を続けたのは、私たちの想像を絶するつらい仕事であったにちがいない。

しかし、東北の人たちの人を思いやる心、感謝の気持ちに強く打たれたという。過酷な状況にいる人たちから、酒井医師は逆に「頑張ってください」と励まされた。「皆さんに感謝したいのは、私の方ですよ」と答えたという。

南三陸町から帰ってからはほぼ1ヶ月後のある日、酒井医師のもとにお菓子が届けられた。お礼の電話をかけると、現地の被災者の方から「電気がやっと一部ですが、通るようになりました」という嬉しい知らせとともに、医療支援への感謝の言葉を贈られた。

酒井先生は、「私が同じ環境にいたら、この方と同じことができるだろうか」。「私はまた被災者の方に励まされてしまった。頂いたお菓子を口に入れたとたん、涙が溢れて止まりませんでした」と話された。

被災者の方から頂戴したものは、きっとこのお菓子だけではなかる。酒井先生はもっと大きな人生の「贈り物」を頂いたにちがいな

い。次にお会いしたらその「贈り物」とは何だったのか、先生とじっくり話し合ってみたい。(2011.5.8 記)

日本再生のために何が必要か

3月11日に東北大震災が起こってから、2ヶ月半が経過した。被災地の状況は、日々刻々と変化している。ライフライン、医療、心のケア、そして何よりも原発という予断を許さぬ難問が山積している。

しかし一方では、瓦礫が徐々に撤去され、道路が開通し、仮設住宅の建設が急ピッチで進められている。東北は粛々と復興に向かっていくかに見える。しかも、この自然災害に整然と対処する東北人の寡黙な勤勉ぶりを見て、感動を禁じ得ないのは、私1人ではあるまい。

私たちスタッフも「全国てらこやネットワーク（通称「てらネット」）」のメンバーと一緒に、毎週のように子どものケア、炊き出し、瓦礫撤去などに現地に出かけている。「鎌倉てらこや」を発信源とする「てらこや」組織は現在、全国に約20ヶ所ある。そして、その全体を統括する団体が、NPO法人「てらネット」である。

今回の大惨事は、「てらネット」の実行力が試されるチャンスといえる。震災を機に、この「てらネット」を日本再生のための持続可能なボランティア組織に育てていかなければならない。全国の「てらこや」は、子どもの育成だけでなく、国づくりという大きな目標を明確に掲げ、手をたずさえ進んでいくべきである。このたびの国難は、第2の「戦後」

といわれている。そこからの再生は、どのようにして可能であろうか。

私はその可能性の1つとして、NPO活動の成熟が必須条件であると考えている。戦後の日本社会は2つのセクター、公共セクター（行政・公の官）と市場セクター（企業・私の民）が主導してきた。しかし、その2つのセクターは市場原理導入の行き過ぎによって、その限界を露わにした。この第2の「敗戦」を日本が生き延びるには、市民の活力と知恵を出し合う第3の共生セクター（公の民）、NPOのさらなる創出と成熟とが何よりも緊急の課題と思われる。

日本を再生させるためには、私たちは過去のおごりと贅沢を捨て、もう一度生まれ変わる覚悟をしなければならない。(2011.5.15 記)

変わりつつある日本

「鎌倉てらこや」も、私の大学のゼミも、東日本大震災の復興支援に向けて、今できることを考え、1つ1つ行動に移そうとしている。ゼミでは、この機会に自分の足元を見つめ、生き方を総点検する議論をしている。そして、今回の震災・津波・原発の問題を、わが身の問題としてとらえかえす思考を身につけたいと願っている。

一方、「鎌倉てらこや」の活動では、「てらネット」と連動し、被災地での支援活動を続けている。教室での議論を実践につないでいきたいという思いからである。この思いは、ついこの間、「てらネット」の2つのイベントで実現された。

福島の大熊町から会津若松へ避難してきた

家庭の子どもたちを励ますため、5月22日会津若松で「スポーツ大会」と「てらこや縁日」を開催した。悪天候の中、全国から大学生約150人が集結し、フィナーレに「福島、がんばれ！」のエールを市民の前で何度も合唱した。

また6月4日、5日には、鎌倉に大熊町の子どもたち25名を招待し、建長寺で1泊2日のてらネット合宿を行った。30人の鎌倉の子どもたち、全国から集った50人の大学生、それに20人ほどの「てらネット」のメンバーが加わり、かつてない規模の大合宿となった。

「鎌倉てらこや」は、今まで鎌倉湘南地区を中心に活動を展開してきた。しかし、建長寺での「てらネット合宿」では、日本中の子ども、学生、大人が集い、交流できるようになった。

震災を機に、日本人どうしの交流がますますさかんになり、徐々につながり、日本は少しずつ変わっていくのではないかと。そんな明るい予兆を感じさせる催しであった。その主役を担った若者たちを見て、私は日本の復興を信じたい気持ちになっていた。

(2011.6.15 記)

命を守るための「熟議」の必要

7月9日、建長寺で第2回目の「お寺 de 熟議」を開いた。今回は、東日本大震災規模の災害が湘南地域に起こった場合、私たちはどのようにして命を守るかをテーマに話しあった。

初めに3人の専門家がプレゼンテーションを行った。まず、市の元職員の方が「鎌倉市

津波ハザードマップ」を用いて、津波避難の心構えを話してくれた。とにかく高い所を目指して逃げるのが、肝要とのことであった。

次に七里ガ浜自治会の方が災害対策の取り組みを報告。「一番大切なのは、普段からのコミュニティ作りだ」と話してくれた。3人目の発表者は、湘南鎌倉地区を5メートル、10メートル、20メートル級の津波が襲った場合どうなるか。「津波シミュレーション」をパワーポイントを使って示してくれた。参加者たちは、わが家は大丈夫かと不安げに見つめていた。

そのあと、4つのグループに分かれ、こうした非常予防策などを思い思いに書き出す作業に取り組んだ。グループリーダーがそれを取りまとめ、全員でどのような行動を起こせばよいか、議論を深めていった。

自分や家族の命を守るためにやれることは何か(自助)。地域コミュニティとのつながりはどうあるべきか(共助)。行政とどのような連携をとっていくか(公助)。この「自助」「共助」「公助」の3つの観点から、命を守るためのさまざまな具体策が提出され、震災以後のまちづくり、国づくりのビジョンが提示された。

私たちの行った「熟議」とは「熟慮」と「討議」を重ねながら、参加者一人ひとりが課題解決を目指し、政策形成を計っていくという新しい形式の討論のことである。これからも、「てらこや」は市民参加型の「熟議」を続けていきたいと思っている。(2011.7.15 記)

コミュニティが命を守る

東日本大震災が3月11日に起こってから、はや5ヶ月が経過しようとしている。しかし、復興の道のりはまだ遠い。

そんな折、鎌倉の七里ガ浜自治会が、地震や津波に備えて「七里ガ浜自主防災マニュアル」を4月に作成し、同地区の約1700世帯に配布した。3.11以後ということもあり、防災意識が高まる中、そのマニュアルは地区の人々に非常に歓迎された。

私は、その制作に当たった、七里ガ浜自治会の防災担当理事の白石徳宏さんに「マニュアル」刊行の意図について、話してもらった。同自治会のメンバーで、「マニュアル」編纂に関わった中里成光さんにも、ご同席願った。お二人とも、まちづくりと次世代育成に熱心な40代初めの男性である。

白石さんと中里さんたちが、この地区独自の「七里ガ浜自主防災マニュアル」を作り始めたのは、東日本大震災に先立つ昨年の秋からのことである。とりわけ3.11以後は、その情報の精度を高めつつ、完成を急いだという。1995年1月17日の阪神大震災、2004年10月23日の新潟中越地震の課題と教訓に学び、行政が進める防災対策とは全く別に、自治会が主体となり、自主防災の対策を練ったのである。

「これはひよっとしたら、日本では初めての市民目線からの防災マニュアルかもしれませんね」と白石さんは少々誇らしげに語る。

阪神大震災、中越地震、それに今回の東日本大震災における人命救助の実態を見てみると、行政の救護隊や自衛隊の力だけでは不充

実なことは明らかだ。それゆえ、「私たち市民の自主防災意識の向上が何よりも大切」と白石さんは強調する。

「マニュアル」によると、自主防災の基本原則は、「自助」（自分と家族の命は自分たちで守る）、「共助」（地域住民が連携して町を守る）、「公助」（行政が進める防災対策、基盤整備に与る）の3点にあるとする。

しかしながら、阪神大震災の場合、生き埋めや閉じ込められた人の救助の実態は、「自力」による救助が35%、「家族」による救助が32%、「友人、隣人」による救助が28%となっている。約95%の人命救助が、「自助」と「共助」によってなされているのだ。しかし「公助」によって救助されたのは、何と1.7%に過ぎない。私たちは気持の上で「公助」に期待しがちだが、むしろ「自助」と「共助」への理解と実行力が問われているのである。

そこで、「自主的な防災組織を機能させるために一番大切な事は何か」と尋ねてみた。すると、「それは普段からのコミュニティづくりでしょうね」と口をそろえた。私は我が意を得たりと思った。近所との日頃からのお付き合いが、今後、非常時の折、尊い命を守ることに繋がっていくのだ。

今回の大津波でも、自主防災策と災害教育の有無によって、生死の境を分けた地域があった。自然災害というのは、いつも「想定外」と考えて、「自助」と「共助」の意識を強くもち、私たちは家族の命と地域の人々の暮らしを同時に守っていかなければならないのである。

白石さんと中里さんは、私のインタビューの

終わりに「自然に恵まれた鎌倉で子どもを育て、見守っていかねばなりませんからね」といった。このとき、お二人がこの「マニュアル」づくりに賭ける本音が、聞けたような気がした。一瞬、お二人が、子どもが健やかに育つことを願っている父親のおだやかな表情に変わったような気がした。(2011.8.10 記)

繋がりつつ、生きる

9月30日、青森の弘前大学の学生たちに話をしに出かけた。かつての教え子で現在、弘前大学の教授を務めている柑本英雄君と彼のゼミ生諸君が、私たち一行を温かく出迎えてくれた。

「国際協力論」を専攻する柑本ゼミの皆さんは、「鎌倉てらこや」の活動について聞きたいという。私は、「てらこや」の基本的な特徴（感動体験、良き人との出会い、複眼の教育、寺社などの場の力の活用など）をかいつまんて話したが、大学とお寺と地域が三位一体となって活動している、いささかユニークな教育ボランティア団体である点も、言い添えた。

しかし、ゼミ生諸君は、とりわけ3.11以後、「てらこや」は被災地に対して、どのような支援活動をしているのかについて、詳しく知りたいがっている様子であった。日本の大学生は震災以後、被災者のために何かをしたくても、どうしていいか分からないという声を聞く。

若者たちはその思いを人にどう伝え、いかに行動へとつなげていくか。一方、そうした若者の真摯な思いを本気で受け止め、それを

1つの活動という形で引き受けてくれる盤石なNPO組織やボランティア団体、あるいは良き大人たちが周囲にいるのかどうか。

生き悩み心優しい弘前の若者たちは、「善き行い」（ボランティア）を通して、人と向き合い、繋がろうと模索しているように思われた。震災以後、「繋がる」、「寄り添う」という生き方を新たな指標としている若者が、増えているのだ。お喋りをさせてもらいながら、私は若い彼らから、地域どうしが、人間どうしが「繋がりつつ、生きる」ことの意味を学んだように思う。

柑本君が私の傍らに坐り、私の拙い話の引き出し役を買ってくれた。早稲田大学のわが研究室から原（小林）良枝、佐川佳之、池田知栄子らの三君が加わってくれていたが、このことも私の励みになった。

東京に戻って数日後、弘前大学の柑本ゼミの6人の学生から、11月19日の光明寺での「鎌倉てらこや」合宿に参加する旨の手紙を受け取った。「繋がりつつ、生きる」喜びを実感した瞬間であった。(2011.10.15 記)

震災とボランティア

—3.11からの教訓

早稲田大学教育学部3年 植田 伸也

私はこの文章を書いている、7月下旬現在、被災地に足を踏み入れたことはない。そればかりか今までボランティアらしいボランティアすらしたことがない。そんな自分が震災について、書いてもいいのか、ただ第三者の傍

観的なコメントに終わらないのかという気がしないわけでもないが、2011.3.11を機に感じたこと、考えたことを羅列する。

震災から4カ月を経た今、気持ちの中で被災者をいたわる気持ちと、まだ第三者の非協力的な自分がいるのは紛れもない事実である。節電しないとイケない、被災者も頑張っているのだから暑さを我慢しよう、そういった良い面もあるのだが、福島は東京と離れている、東京では社会がもう普通に機能しているから震災とは無縁だ、というダークな面もぬぐい去れない。

しかし、この震災に関して一点だけ思うことがある。それは何かというと過去10年を見渡して、これほどまでの長期に渡って同じことが報道されたことがあっただろうか、ということである。テレビを見ると、4カ月経って、震災後の救援から、すでに復興にシフトしているように感じる。しかし、一方ではいまだに、捜索活動が続いているし、仮設住宅の建築も完全には至ってないと聞く。そのような震災にかかわる情報を、この4カ月間毎日聞いてきた。「震災」というフレーズを聞かなかった日がないような気がする。

被災者には申し訳ない言い方になるかもしれないが、震災直後に受けた、震災自体に対する恐ろしさよりも、そのように4カ月も毎日、報道されることである、ということの方に私は恐れを抱く。テロや戦争など21世紀に入って、いくらかの、重大事件があったが、今までテレビが4カ月も毎日、同じ話題を報道するということなどなかったからである。そう思うと、私の中で、震災直後よりも、む

しろ今の方が、震災に対する関心は高まっているかもしれない。

私は9月の8日から岩手県の宮古市にボランティアに行くことにした。行くことが半年経ってからだが、正直、発生当初はまったく行こうと思っていなかった。なぜかというと、私の母が看護師であり、そのような現場に以前も足を運んだ経験があり、今までその話を聞いていた自分は、到底そのような現場に行くことなどできないと思っていたからである。「助きたい」の一心で奮い立たせられるほど私の意志は強くない。行っても、自分が手伝えることなどあるのかと、とも思った。

そのような思いが自分の中であったため、やっと今になって、一人の日本人として自分の国で起きたことを、自分の目で確認しようとの思いから、ボランティアに行くことを決意した。少し動機が不純な気がしなくもないが、これから数十年後、私が誰かに震災について話す機会があったときに、実体験として話すことができるようにしようと考えた。

数日前、教育学部主催の漫画家・やくみつる氏の講演会に言った。やくさんは震災後、ボランティアに行ったそうで、その行った動機について「我々（芸能人）は普段から、皆さんに良くしてもらって（おいしいものを無償で食べたり、街でチャホヤされるなど）、その贖罪の気持ちがある」からと言っていた。そう言われると我々に贖罪の気持ちがあるわけでもないし、なぜボランティアに行きたがるのかわからない。私の考えとしては別に、ボランティアは、奉仕であり、利益を求めているのだから、動機が不純であってもいい

と思うし、なくても構わないと思う。

しかし、私が思うに、みんな一回は被災地を見てみたいという思いがあるのではないだろうか。また、行って活動してみることで何か感じるものがあるかもしれない、それぐらいのイメージではないだろうか。逆に言うと、ボランティアは深く考えず、それぐらいラフな気持ちで参加できるということである。災害ボランティアといっても、かしこまることなく、なんとなく気になった、一回見てみたい、それぐらいの気持ちでいいのではないだろうか。それぐらい楽な気持ちで「ボランティア」というものを眺めてみると、人は知らず知らずのうちにボランティアに関与しているのかもしれない。

最初に、私は震災後まったくボランティアをしていないと言ったが、思えば、余った数円のおつりを募金したことぐらいはあった。ある人は冗談半分で、「オレは今、被災地復興のため、宮城県産の酒を必死で飲んでますよ。」と言っていた。微妙だが、回りまわって、義援金として、復興になるといえなくもない。私は、ボランティアをそれぐらいラフな気持ちでとらえると、誰でも気づいていないだけで、どこかで関わっているのではないだろうかと思う。一度、こじつけでもいいから、自分の中でボランティアとかすかにかにでも、関わっていることはないだろうか、と考えてみてはどうだろうか。

震災後のボランティア

早稲田大学国際教養学部2年 村田 久美子

わたしがまず言いたいのは、震災後、ボランティアにたいしての考え方が変わったということです。震災前は、あれほど大規模に日本に海外の支援が入ってくるなどということは想像したことがなかったですし、その国際協力が国際関係に大きく関わってくること、ボランティアする側は与える側ではなく経験をさせてもらう側だということなど、インターネットの普及でもはや世界中の現象が他人事ではなくなったことを再認識したあとで、いろいろなことがすごく身に沁みて感じられました。

ある中国ニュース通信の記事で、中国人留学生たちが震災後、日本に残って復興に励んだという記事を読んだのを覚えています。そこに書いてあったのは、多くの留学生が帰国したが、残って復興に立ち向かった学生たちも少なくなかったということで、彼らは勉強だけでなく生活もおおいに助けてくれた日本人に恩返しをしたくて残ったというものでした。

初め読んだときはあまり信じられないという感情にかられましたが、“甘やかされて育ったというイメージが付きまとう中国の若者だが、彼らが働いている姿はもはや世間知らずの子供ではなくなった”、“今回の災害は日本に甚大な被害をもたらしたが、中国人学生たちは自らを成長させる得難い機会を得た。秩序正しい日本人の姿に彼らは感動したことは

いうまでもない、日本人と中国人の理解はさらに深まっただろう。”というところを読んで、実際に現場に行くこと、そこで現実を見て人々と関わることの影響の大きさに目を覚まされました。

わたし個人は今回、震災後のボランティアにまだ行けていません。それもなんとも小さな理由ばかりを気にして諦めたのです、お金や、ライフラインが断たれた震災地での生活の大変さや、行ったら迷惑がかかるのではないかなどです。

しかし、この記事を読んだあとは完全に自分の中での構え方が変わりました。もうひとつ学ぶところは、やはり、ボランティアはかわいそうな人々に物をあげに“いってあげる”行為ではなく、自分自身を強くする経験をさせてもらう機会だということです。ボランティアの偽善的イメージを払しょくする出来事でした。

また、いろいろなニュースやネットを見て思ったのは、災害大国であるにも関わらず、あまりそれが教育現場で教えられていないということです。これはおそらく、今回の津波などで特に、かなりの人が危機感を持った部分だと思います。が、なぜ防災教育が手薄に感じられるのでしょうか？ 今回の地震後、「頑張ろう日本はひとつ」のような内容のTVCMが多く流れていますが、そろそろ具体的な防災内容のものに切り替わってもいいのではないかと思います。

経済新聞によると、東日本大震災を受けて、子供の危機回避能力を高めたいという教育機関は多くあったが、具体的な方策について情

報収集に苦勞していたところがあったようで、ついにこの夏、国が動き始めたとありました。それは、全国各地で行われた優れた防災教育の例を紹介するウェブサイトを開設するというものようです。

しかし、これで本当に今回の教訓を活かすのに十分な仕組みなのでしょう？例えば震災後の報道で、「先人の忠告を守った村は津波被害から助かった」「危機感を持っていた校長先生の方針により、災害に関する時間を設けた学校の生徒は多くが見事に助かった」といった報道がありました。この例に見られるように、先人の教訓が伝わるようなシステムが成立していたかどうかで、大きく結果が変わったように思えました。

ですから、わたしが導き出した結論は、“三世代の出会いなおし”を各地域規模で実行するというものです。ここでいう三世代とは、子供、若者、年配の人々のことで、戦争体験の伝承にも当てはまりますが、その三つの世代が関わりあえれば、各時代の教訓が引き継がれやすくなるはずで、若者は年配から学び、若者がいることによってさらに子供たちが飲み込みやすいという効果を期待したものです。

将来日本の教育を変えたいと願っていた個人としては、防災教育というのは無視できない項目であると思いました。この仕組みを成り立たせるための、地域PTA協力の仕組みや、学生が学校を欠席免除されることが許される日が来るのはいつでしょうか。

震災ボランティアに臨むために

早稲田大学文化構想学部 2年 内田 杏奈

3・11の経験

震度5強の地震が東北地方を襲った頃、私は大学の学生会館にいた。登山サークルに所属していて夏休みには一週間ほど山を縦走するのだが、当日はそれに向けての医療講習会の日だった。捻挫や骨折に対応するためのテーピングの練習をしている最中にそれは起こった。学生会館の4階ではあったもののその揺れは激しく、はじめは「いつものことだ」と思っていたサークル員たちも本揺れが来たら大急ぎで机の下に潜り込んだ。

警備員の誘導によって学生会館からは人影が消え、逆に戸山公園は避難民で溢れ返った。私のサークルの方針としては、電車が止まってしまっただけで宛がなくなった人を早稲田近辺に1人暮らししている者が数人ずつ引き取って一晩明かすことになった。私がお邪魔した部屋には12人もの人がぎゅうぎゅう詰めで、必死に家族と連絡を取ろうとする者やテレビから流れる映像を心配そうに見つめる者などそれぞれであった。

2つの現実

3.11は一度に2つの現実をもたらした。自らの体験として経験した3.11とメディアによって伝えられた3.11である。自分が経験した3.11は、戸山公園に避難した生徒たちが少しの恐怖と安堵感をもって語り合い、これから一晩をどう過ごすか考えあぐねるだけのもの

だった。一方メディアがもたらした現実には地震によって見たこともないような強い揺れを示す地方テレビ局のデスクであったり、あつという間に競り上がってきて車や家を飲み込んでいく津波であったり、受け入れるには厳しいものであった。

被災地との溝

震災後、初めの方は被災地支援活動が活発であったものの、現在では募金活動もあまり見かけないし、「自粛」などという言葉が叫ばれたが「そろそろいいかなと思いました」と街頭インタビューに答えて旅行を楽しむ者も出てきた。被災地以外の地域での震災への受け止め方はこのようなものである。一方で被災地はというと復興作業に追われ、ボランティアが足りないと訴えている。

現在の被災地とその他の地域との温度差が2章で記したような2つの現実の違いから生まれたことは間違いない。確かに私たちは2つの現実を目の当たりにしたが、一方が実際自分の身に起こっている現実で一方がそうでないとしたら、どちらが自分にとってより守るべき現実であろうか。壮絶な被災地の現実から目を背けたい心理も相まって、我々は前者を取らざるを得ないのだろう。

ボランティアの本質

現在我々と被災地には、被災地の現実を現実として受け止められない、受け止めたくないということから生まれた深い溝があるが、それでも被災地はボランティアを必要とし続

けていることに変わりはない。

そもそも私はボランティアとはもともと悲しみや苦しみを乗り越えるための活動だと考えている。それは環境問題だろうと人権問題だろうと関係なく、とにかく自分が問題だと思ったことを自己の悲しみや苦しみとして捉えて克服するということである。つまりこの震災でのことを言えば、被災地の現実を受け止めて自己の悲しみ・苦しみとする必要があるということである。

現実と歩み寄るために

目を背けたい現実を受け入れるにはどうしたらよいのか。それは現地に行く以外に方法は無いだろう。ボランティアとは自分が問題だと思ったことを悲しみ・苦しみとして捉える事だとすれば、世の中に蔓延る様々な「問題」を知り、自分の身体で体験する必要がある。これは震災ボランティアだけに言える事ではない。環境を守るためのゴミ拾いのボランティアだって、ゴミがポイ捨てされているという現状を知らなければ行動に結びつかない。

おわりに

最後に種明かしをするようで申し訳ないが、今まで私は震災ボランティアに行こう、行こう、と思っただけのもの、何のために行くのか、自分が行って何になるのかと長らく考えていた。先にボランティアに行った人の話を聞いて、ヘドロをかきだしたり、ゴミの片づけを手伝ったりするために行くのか、と疑問に思っていた。だが、様々な文献を読んで

いるうちに考えが固まってきて、その結論が今まで記した様である。はじめからボランティア活動をしよう、と思うのではなく、まずは体験してみようという気持ちでボランティアに臨むこと。それが自分の生きる道を選ぶうえでも重要なのだろう。

震災とボランティアについて

早稲田大学人間科学部5年 大川 貴士

7月1日、2日に石巻市で震災ボランティアを行ってきた。私が参加したのはSNSで募集を集ったボランティアだった。8名の社会人と共に、津波に巻き込まれた石巻市の住宅の瓦礫撤去を行った。

この経験で感じたことは、「ボランティア支援側のエゴ」だ。そして、震災ボランティアで最も大切なこと、被災者との信頼関係を築き、本当の胸の内を知ることだと思った。支援する側の自己満足で行動を起こす事は、被災者を苦しめることになるのではないか。

石巻市での瓦礫撤去の最中のことだった。作業をしている家の住民が訪ねてきた。「ここにはもう住むつもりはないからいいよ」と住民は小さな声で話しかけてきた。その対応を受けたボランティアリーダーは、「お父さん。この家キレイにしておくからそんなこと言わずにまた住もうよ。頑張ろうな」と住民に励ましの言葉をかけた。住民は目を反らしながら頷いていた。

この家の住民は家から拾い出されたアルバ

ムも「いらないよ」と受け取らなかった。しかし、ボランティア・スタッフになだめられ、ようやく持ち帰ることになった。その行動に住民の意志は感じられなかった。現場に来ていた子供達も、震災以前に遊んでいたであろう玩具を見つけても手に取ろうとさえしなかった。決して言葉にはしなかったが、この地には何の希望も持ち合わせていないということ、行動によって意思表示しているように思えた。

「お父さん喜んでいたよ。やって良かったな」と帰りの車内でボランティア参加者達は満足そうに語り合っていた。自分達の支援が目に見えて役に立っていることを誇らしく語り、各々がいかに継続的に復興ボランティアに携わっているかを語り会っていた。その姿を目にした時、家の私物を投げ捨てられる姿をひっきりと眺めていた住民の表情が浮んできた。突然やってきたどこの誰かもわからない集団の一方的なおせっかいに疲弊しているようだった。このボランティア・スタッフ達は、果たして住民の本当のニーズを理解していたのだろうか。ボランティア・スタッフの一方的な自己満足で終始している活動のように思えた。

このボランティアを通じて、私には住民が止むを得ず支援を受けているよう見えた。そして、支援と被災者のニーズのミスマッチを感じた。復興支援において最も大切なことは、まずは、本当の胸の内を知ることではないだろうか。そのための信頼関係を構築する時間が足りていない。突然やってきた人間に、心の底にある感情を打ち明けられる訳がない。

7月24日のニュースで、神奈川県が岩手・遠野にボランティアの宿泊施設を設けると発表した。支援者の長期滞在を実現させる宿泊施設の完成は、被災者との信頼関係を生みミスマッチのない支援を可能にするだろう。

被災地ボランティアにおいて、最も大切なことは「信頼関係」の構築であると思う。老若男女を問わず、まずはお互いの人間関係を構築する時間を大切にするべきだ。その過程のなかで、ボランティア側がすべきこと、被災者が本当に必要としていることの輪郭がおのずと見えてくるであろう。ボランティアの宿泊施設の設置が、解決の第一歩になることを期待したい。

震災後の子供たちの心のケアと「鎌倉てらこや」

早稲田大学国際教養学部2年 白井 唯

3月11日の東日本大震災は日本のみならず、世界中に大きなショックを与えた。防波堤を越え、民家を次々と飲み込む容赦ない濁流の映像はTVを通して見るだけでも恐ろしい光景だった。世界各国でも大々的に震災について報道され、多くの国々が温かい支援を日本に送ってくれた。

国内でも、義援金募金や、物資支援などをはじめとするボランティアの輪が広がりたくさんの人々が被災地の力になろうとしている。実際に震災後、たくさんの人々がボランティアに参加の意欲を見せ、多くの人々が現地

足を運んだり、または物資を提供したりと様々な形で協力した。

しかし、現状ではボランティアの人数は強い減少傾向にあり、各地で悲鳴があがっている。朝日新聞によると、6月の時点ですでにボランティアの数は阪神淡路大震災後の同時期に活動していた人数と比べて3分の1程度の42万程度しか集まっていないようである。

被災地では瓦礫などの撤去が進み、少しずつ復興へのめどが立ってきた。ここからが本番であろう。綺麗になった街を一から建て直し、普通の生活が送れるような状態にするまでの過程にはまだ多くの手助けが必要だ。そしてもう一つ大事なことは、被災者の心のケアだという。特に繊細な子供たちの心のケアはとても重要だ。私はこの子供たちの心のケアに「鎌倉てらこや」のようなボランティアが必要なのではないかと思う。

先日の報道番組では、被災地に住む子供たちを、被災地から離れたある地域が「鎌倉てらこや」の建長寺合宿のような合宿に招待しているというニュースが報道されていた。ある参加者の女の子の母親は、女の子が震災後、原発の影響を懸念し自ら外に出て遊ぶことをやめてしまい、母親が窓を開けただけで「閉めたほうがいいんじゃない？」と自分から窓を閉めてしまうようになってしまったことから、少しでも思いっきり外で遊んでほしいという思いで今回の合宿に参加を決めたと話していたのが印象的だった。

参加をする前の取材では、女の子の家には室内にトランポリンが設置されており、体を動かしたいときは屋内でトランポリンをする

女の子をお父さんがさみしそうに見ている、直接不安などを口に出さなくとも、行動などから彼女は深いストレスを受けていることが感じられた。しかし、その後合宿にてお友達と外で思いっきり遊んでいた女の子の表情は生き生きとしており、とても楽しそうに遊んでいた。

子供たちは不安を簡単に口に出せない分、別の方法でストレスを発散させる必要があるのかもしれない。そんな子供たちの遊び相手になってあげるのはとても重要なことかつ我々学生にもできることである。年の少し離れた、でもまだ近い年代のお兄さんお姉さんと遊ぶことで子供たちも気がまぎれ、また大人に直接話すよりも楽に震災の話ができるかもしれない。これはまさに「鎌倉てらこや」が行っている活動と共通しているのではないだろうか。

「鎌倉てらこや」のように、様々な年代の人や子供たちが交流できる場がもっと身近にあれば、被災地の子供たちも心の奥に抱えた傷を少しずつ癒していくことができると思う。前述の地域のように、子供たちを受け入れ子供達同士の交流を図ることも心のケアの一つになるだろう。「鎌倉てらこや」の建長寺合宿に被災地の子供たちを招いて合同合宿を行うのも面白いかもしれない。様々な言いあわせのないような不安に悩まされる子供たちにとって新しい出会いは良い刺激となり気持ちを少し楽にすることができるきっかけとなるだろう。多くの子供たちが子供らしさをまた取り戻すためにも、これから「鎌倉てらこや」の様な活動がとても意味のあるものになって

いくのではないだろうか。

非被災地での生活は、節電以外はすでに日常へと戻っており、だんだん東日本大震災そのものに対する関心が薄れている時期かもしれない。しかし、被災地の人々にとっては復興への長い道のりを歩みだしたばかりである。非被災者にはわからない苦しみにまだ人々は悩まされていること、そして、私たち非被災者では考え付かないような大きな傷を負って前へ進もうとしている子供たちもたくさんいることを忘れてはならない。その子たちの心の傷をいやすためにも、また純真無垢な子供心を取り戻すためにも、ぜひ「鎌倉てらこや」のような子供たちが交流できる場所を提供するボランティアの活動が、これからたくさん地域で広まってほしい。

震災とボランティア

早稲田大学社会科学部2年 伊藤 未希

2011年3月11日、東北を中心に今までに経験したことのない大地震が発生した。私は友人と遊びに行った先で地震に遭い、電車は動かない、電話やメールは通じないという初めて経験する事態に不安は高まるばかりだった。私と友人は家に帰ることができなくなってしまったので、たまたま近くにあった友人の知り合いの家に連絡をとって、そこでお世話になった。その家庭は初めて会った私にもとても良くしてくださり、「困ったときはお互い様だから」と言ってとても気遣ってくだ

さった。

この「困ったときはお互い様」という言葉は、簡単で普通のように思えるかもしれないが、私はこの言葉に納得させられた。普段は関わったことのない他人でも非常事態のときには力を貸し合える、人の優しさと温かみを感じた。関東でも大地震はいつ起きてもおかしくないと言われていたし、自分もいつ同じような状況に陥るか分からない。そのときはきっと誰かに助けてもらうことになるのだろうと考えると、被災地の状況を他人ごととは思えなかった。それから少しでも被災者の方々の力になりたいと思うようになったものの、とくに震災直後は現地の負担にならないようにしなければならなかったし、学校が始まってからは課題やアルバイトが忙しかったりして現地には行くことができなかった。なにより、自分にボランティアとして役割を果たすことができるのだろうか、ということを考え出してしまった。しかし、現地へ行くことが復興に貢献する近道なのかもしれないが、それだけではなく自分が今いる場所でできることもあるのではないかと思い、たまたま友人の誘いもあって街頭での募金活動に参加した。多くの人が足を止めて義援金を寄付していくのを見て、たくさんの人が何か貢献しようと考えているのだと感ずることができた。募金活動だけでなく、チャリティーイベントに参加したり、被災地の特産品を買ったりすることも貢献の一つになるだろうし、自分の身近からできることはたくさんあるのだと思う。どんなに小さなことでも、それが集まって大きな力になると信じている。

3月11日以降、毎日を当たり前のように生きていられることが幸せなことだと感じるようになった。先行きが見えないままで避難生活をしている人も多くいる中で、当たり前のように食事をしたり、学校へ行ったり、物を手に入れることができる。私はこんな生活がいつまで続くかわからないと自覚しながら享受し、時間を無駄にせず毎日を送ろうと意識するようになった。私たちが住む首都圏の生活はほとんど元に戻っているが、被災地の復興にはまだまだ10年単位の時間がかかることを忘れてはならないだろう。感謝すべき自分の日常生活を送りながらも、休みを利用して復興支援にも足を運びたいと思う。

今年受講した早稲田大学オープン教育センター・テーマカレッジ「地球・地域学のすすめ」の授業では、震災に限らずボランティアについて考える機会が多くあった。私はボランティアに興味を持っていたのだが、それは漠然としたもので深い理由など無かった。授業で考えるうちに、ボランティアをしたという自己満足しか残らないのでは、と疑問を持つこともあった。ボランティア活動を何度か経験したことのある友人は、相手にとっても自分にとってもプラスになるものだと言っていた。普段とは違う経験をすることで、自分の無力さが見えることもあり成長できるようだ。自分が成長できるということが自己満足だと考えるとしたら、それは良い意味だと捉えて良いと思った。

一口にボランティアと言っても、その種類はさまざまである。今回の震災のような場合は、街並みを取り戻すための力仕事のボラン

ティア、被災者の方々の心をケアするボランティア、専門分野では医師や治療のボランティアもある。私が参加したことがあるのは地域活性化のボランティアで、現地のイベントを手伝いながらも共に楽しむような活動だった。活動の種類によってどういった姿勢で臨むかは大きく変わってくるだろう。どういった形であれ、誰かのため、何かのために自発的に動くということに変わりはない。偽善だという人もいるようだが、そもそもボランティア自体が特別視されるようなものではなく、日常の延長線上上なのではないかと思う。経験の浅い自分には、ボランティアについて考えるべき点が多くある。色々な活動に参加しながら、改めて考えていきたい。

東日本大震災と「鎌倉てらこや」

早稲田大学文学部2年 原山 高輝

2011年3月11日14時46分18.1秒、東北地方太平洋沖地震発生。この本震およびその後の津波や相次ぐ余震による大規模地震災害が「東日本大震災」である。本稿では東日本大震災を近代合理主義的「日常」の限界として設定し、近代合理主義的「日常」およびその限界を示し、本来的にわれわれ日本人が東洋的に持っていた自然と共に生き精神的なものを大切にするような世界へ回帰するよう促す「非日常」との弁証法的対立において世界を把握することとする。

デカルト以来の近代合理主義という「機関車」は近代化の過程で人々の信頼を勝ち得た

物理的自然科学や資本主義などをその両輪にして走り続けた。しかし近代合理主義は本来人間が把握しきれない自然さえも機械的に還元して把握できると勘違いしてしまった。合理性が非合理性を矛盾しながら支配してしまったのだ。この内部矛盾の限界として「非日常」は人間疎外をはじめとした自由意思の問題や2度の世界大戦、自然の脅威などをわれわれに提示し続けたが、その都度われわれは近代合理主義的「日常」へ回帰してしまい、近代合理主義という「暴走する機関車」を加速し続けてしまった。しかし東日本大震災においては「日常」への回帰に抗おうとする動きがみられた。そのひとつが「鎌倉てらこや」をはじめとする「地域教育ボランティア」である。以下、東日本大震災における災害ボランティアと2種の教育ボランティアについて論じる。

1995年の阪神淡路大震災において災害ボランティアをはじめとしたボランティア活動が日本で初めて認知され、その後急速に受容されていった。その理由として以下がある。人間は元来、特定の価値観の内部で価値ある行動を示すことで他者から承認を受け実存となることを欲求する。しかしながら合理性という単一の論理が生み出した価値観の多様化に自己を見失い実存になれずにいた。そこでボランティアという普遍的な道徳的価値を持つ行為が、「ひと(Das Man)」が承認を受け実存(Existenz)となるための手段の一つとなり受容されていったのだ。この1995年を「ボランティア元年」と位置づけるならば、さしあたり東日本大震災の起きた2011年は「ボランテ

ィア成熟元年」となるであろう。

阪神淡路大震災では、被災地からわずか数キロメートルにある大学で、普段どおりに部活動が行われているなどの状況もあった⁽¹⁾。一方、今回は被災地から遠く離れた地域から本震直後から災害ボランティアに参加する人が大勢いたことから、日本におけるボランティアの成熟度が見て取れる。しかし、「ボランティア成熟元年」にはじめて認知されたボランティアがある。それが「教育ボランティア」である。というのも、今回の地震により死亡または行方不明となった教員をはじめ学校関係者が多数おり、さらには授業を行う場所も確保できず、被災地の学校教育が危機に直面したからだ。実際この危機への対応として東京都は公立学校教員を被災地の学校に派遣した⁽²⁾。

しかしこの教育ボランティアは、「学校教育ボランティア」にすぎない。本来、教育は学校・家庭・地域という3つのアспектを持つ。そこで「学校教育ボランティア」のほかに考えられるべきは「地域教育ボランティア」であり、以下これについて述べる。(なお「家庭教育」は家族以外がボランティアで行うことは難しく、行ったとしても結局は「地域教育ボランティア」に包含される。)

以上で災害ボランティア・学校教育ボランティア・地域教育ボランティアの3つに言及したが、前二者と後者には決定的な差異がある。それは「日常」への回帰に抗おうとしているかどうかである。災害ボランティアは被災地を復興し「日常」化することを目標とし、学校教育ボランティアは被災地に偏差値至上

主義的な「日常」の学校教育を回復することを目標としている。一方地域教育ボランティアは地域教育の立て直しから、学校・家庭・地域の三位一体の本来的な教育を立て直し、最終的には「日常」から離脱し日本を立て直すという「ユートピア」的理念を掲げている（なおここでの「ユートピア」にはトマス・モアの定義にあるネガティヴさはなく、むしろ<いまーここ>に実現可能な脱「日常」世界というポジティヴさが含まれる）。

この理念は時を得たものだ。というのも東日本大震災により、今この瞬間が「暴走する機関車」を止める最後の機会かもしれぬことを自覚した現在、近代合理主義から離脱し<いまーここ>に「ユートピア」を実現することがわれわれに切実に求められており、地域教育ボランティアの理念はこの要求に合致しているからだ。そしてこの理念を実践しているのが「鎌倉てらこや」であろう。

本論をまとめると「鎌倉てらこや」をはじめとした地域教育ボランティアが今日求められるべくして求められている状況が「東日本大震災」という近代合理主義的「日常」に対するアンチテーゼにより明るみになったと言える。今回の大震災にただ悲嘆し「日常」に回帰するだけではもう済まされない。「暴走する機関車」を止める最後の機会かもしれぬことを自覚し、<いまーここ>に「ユートピア」を実現することが必要だ。近代公教育の拡大・浸透により教育が社会化し社会が教育化した今日、教育の立て直しを目標とする「鎌倉てらこや」は「ユートピア」の実現に最も根本から寄与する活動であろう。

<参考文献>

- NHK取材班 (1995)『ボランティアが開く共生への扉 阪神淡路大震災からの報告』NHK 出版
- 末延岑生 (2006)『ボランティア文化のあけぼの 一阪神・淡路大震災を振り返る― 実践編』兵庫県立大学経済経営研究所 研究資料 No.197
- 森下一・池田雅之 (2008)『てらこや教育が日本を変える』成文堂
- 山竹伸二 (2011)『「認められたい」の正体 承認不安の時代』講談社現代新書

注

[1] 末延 2006 p.121

[2] 東日本大震災被災県への東京都立学校教員の派遣について (第一次)

<http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2011/04/2014r700.htm> (2011/07/08 アクセス)

私と震災ボランティア

早稲田大学文学部3年 源五郎丸 雛子

東日本大震災と私

3月11日、私は九州の実家にいた。14時46分、日本列島の大部分がその揺れを感じるような大地震発生時も、私は微塵も異常を感じなかった。発生から一時間ほど経った頃、初めてテレビのニュースで大変なことが起こったようだと知った。その後は、会社や学校から帰宅した家族とニュースを見て過ごした。皆、知人と会うと、「大変だ」と話したし、街中にもあちこちに「大変だ」と言い合っている人がいた。義捐金箱はすぐにいっぱいにな

ったし、役所には市民が持ち寄った支援物資があふれた。しかし九州にいる我々にとって、震災は、日常を断絶するほどの力を持たなかった。私の震災への関心は徐々に冷めていった。ひと月ほど震災を忘れて過ごした。

5月になって大学が始まった。私は地域振興に関するボランティアに関心があったので、テーマカレッジ「地球・地域学のすすめ」を受講した。しかし始めてみると、授業は震災ボランティアについての内容ばかりだった。ボランティア経験者やそういった団体の方、先生が熱心に話をされた。でも人間は、自分が冷めているときに一方的に熱く語られると余計に白けるばかりである。私もどんどん白けていった。

だがそんな中でも、ほとんどの語り手が「現地に行けばわかる」と言っていたのは印象に残った。その頃、WAVOCの活動に参加して被災地に行った友人がいた。彼女はそれまでボランティアに全く関心を示していなかったが、WAVOCの活動から帰るとすぐに、「行ってよかった。行けばわかる。ぜひ行くべき」と感激した調子で言っていた。そんな様子を見て私は、「行けばわかる」のではなく「行かなければわからない」のではないかと考えるようになった。

とりわけ友人の変化に刺激を受けて、私は震災ボランティアに行ってみたく思うようになった。その動機は、被災者の支援をしたいというよりはむしろ、友人をそんな風に変化させたものを知りたいということである。もちろん、行けば被災者への配慮にも努められ、ボランティアの責任も果たすつもりであ

るが、そんな動機で被災地に行くのは不謹慎かもしれないという懸念もある。でも授業でも現地の人の話として、「とりあえず来て、知ってほしい」という言葉が紹介されたので、動機云々よりも行くという行動が大事だと判断している。

震災について私が始めたこと

震災ボランティアについて冷めた感情を持っていた私は、ボランティアに行った友人の変化に刺激を受けて、自分も行ってみたく考えるようになった。

それでまず参加するボランティア団体を探した。授業では「鎌倉てらこや」でのボランティア活動の参加者募集が紹介されたが、私は子どもがあまり好きではないので、これには参加しなかった。

そこで情報収集としてまず、学内で開催された、いくつかのボランティア団体を紹介するワークショップに参加した。それぞれの団体の活動内容、募集日程や、ボランティアに行く際の準備、活動中の様子などについて具体的な話を詳しく聞いて、とても参考になった。

翌日、WAVOCの夏休み中のボランティアの募集に、締め切りが近かったので、応募した。他の団体にもこれから申し込むつもりである。夏休みにはほかの予定もいろいろあるが、できるだけたくさん震災ボランティアに参加して現地に行ってみたく考えている。

ボランティアを経験したら、そのあとでもう一度、震災ボランティアの意義や在り方について考えてみようと思っている。テーマカ

レッジでも何度もグループワークで話し合ったテーマではあるが、そのとき出た意見は、口先だけのものに思われてならなかった。論理は通っているが、形だけの、魂はこもっていない感じである。それは、私が震災ボランティアを経験していなかったことに由来すると推測している。だから次は、ボランティアの経験を土台とし、実感のこもった納得できる答を見つけたいと思う。そのうえで「今、私にできること」を見つけ、行動していきたい。

ボランティアとは何か

早稲田大学文学部2年 河島 朋美

今年3月に起こった東日本大震災は、私の持つ価値観に大きな影響を与えました。私は普段、更生保護に関するボランティアのサークルで活動をしています。これは自身の将来に役立つと思って始めたものでしたが、ボランティアという活動そのものにも満足感を感じていました。そして、「自分は他人の役に立っている」と無意識のうちに思い込んでいました。

しかし今回の震災の映像を見て、私は衝撃を受けると同時に自身の無力さを思い知りました。私が被災者の方のために出来ることがいかに限られているか、災害に対していかに無知であったかを感じました。自分が携わっていた「ボランティア」とは何だったのかも分からなくなりました。私が、テーマカレッ

ジ「地球・地域学のすすめ」を履修したのは、自身のボランティアに対する観念を固めたいというのが一番の理由でした。

私はこの授業で他の学生の皆さんとの意見の交換を通して、「他者の為に何かをする」ということの難しさを知ることが出来ました。まず、ボランティアを必要とする方々全てを、「他者」という言葉でひとくくりにしていたこと自体が大きな間違いだと気付きました。私が普段関わっているボランティア活動が対象とする方々と、災害に遭い大切なものを失ってしまった方々では、まるで必要としているものが違うのです。そのことを失念したまま「ボランティア経験がある」などと言っても、まるで説得力のない言葉です。

また、皆さんと震災の被災された方々に何が出来るとかを話し合うにつれて、ようやくボランティアという言葉の多義性に気付きました。一口にボランティアといってもどの範囲までを指すのか、私は明確な答えを出すことが出来ません。被災地に向かい自分が手伝える限りのことをするのがボランティアならば、自分の住む町で節電に努めることはボランティアとは呼ばないのでしょうか？

私なりに出した結論ですが、ボランティアの定義はやはり「見返りを求めない」ということです。こう言ってしまうと当たり前のことのようにですが、意外と私達は忘れてしまっている様な気がします。例えば計画停電は、震災の影響でエネルギー不足になることを見越し、国民平等に電力が行き渡るように講じられた政策です。被災者の生活を守ることに繋がっていきます。なのに、この計画停電

によってもたらされた不便さに対して不平不満を言うことは、すでに「見返りを求めない」ということから外れているのではないのでしょうか。

「見返りを求める」という気持ちはどこから生まれるのでしょうか。「見返り」という言葉を辞書で調べてみると、「相手のしてくれたことにこたえて何かをすること」という説明が載っています。「してくれた」という表現に引っかかりを覚えます。相手のある程度上に見る気持ちがあって初めて出てくる表現です。何が言いたいのかと言うと、「何かをしてあげる」という考えこそ、「見返りを求める」という気持ちに繋がるのではないか、ということです。

つまり、「誰かのために何かをしてあげる」という考えは裏を返せば、自身の優位性を前提とした考えが根底にあるのではないのでしょうか。今回のケースに限って言えば、「被災者」と「被災しなかった自分達」という線引きをしてそこに優位性を見出している様な気がします。

この無意識のうちに感じている優越意識こそが、ボランティアに対する最大の壁なのではないかと思います。被災者の方々のために何かをするのではなく、してあげる、という考えを持っている限り、本質的な意味で変わらないのです。見返りを求めないのではなく、見返りなどなくて当たり前なのだとすることに気付かなければなりません。何故なら、私達と被災者の方々を分ける線などどこにもないからです。あの東日本大震災で岩手県や宮城県が大きな被害を受けたのはあくまでも偶

然です。明日また震災が起これ私の住んでいる町が壊滅しても、何の不思議もないのです。自らが被災しなかったことに対する優越意識は、多くの被災者の方々に苦しみを与えている様な気がしてなりません。

まず私達は、被災者の方々に対する優越意識を捨てることが何よりも先決です。たまたまあの日に被災しなかった自分はただ幸運なだけであって、被災した方々と何も変わらないということを知るべきです。そして被災者の方々が抱えている問題に対して自分達が何を出来るのか、自分達の生活を守りながらも日々真摯にそのことについて考え、今までの自分達の生活に問題意識を持ち、対策を講ずる努力をすべきだと私は考えます。



福島の子もたちと学生との交流